

第6期第3回（令和5年度第3回） 横浜市子ども・子育て会議 青少年部会 会議録	
日 時	令和6年2月9日（金）午前10時00分から午前11時00分まで
開催場所	青少年育成センター 第1研修室
出席者	津富部会長、萩原副部会長、倉根委員、島田委員、辺見委員、梁田委員、横田委員、平森委員
欠席者	三輪委員、矢尾委員
開催形態	公開（傍聴者3人）
議 題	青少年の地域活動拠点づくり事業の効果的实施に向けた検討について
決定事項等	議題について、委員に説明を行い、内容について意見交換をした。
<p>&lt;議事1&gt; 青少年の地域活動拠点づくり事業の効果的实施に向けた検討について</p> <p>【事務局】 青少年の地域活動拠点づくり事業の効果的实施に向けた検討について説明（資料3）</p> <p>（萩原委員）</p> <p>国の指針も踏まえて事業点検をしていて、内容の濃いものになっていると感じる。</p> <p>「利用者の成長の実感度合いの向上」について、大人目線での成長ではなくて、その子自身の中で、できなかったことができるようになったという評価指標があると良い。また、国の指針に「全てのこども・若者の健やかな成長と幸せな状態（ウェルビーイング）の向上に資すること」とあるように、幸福感、この場所で充実した時間を過ごしているということが分かる指標も立てる必要があると思う。</p> <p>「体験・交流の機会の提供」についても、成長度合いだけでなく、体験をした中での、楽しさや幸福感を感じているかという評価が必要だと思う。</p> <p>内閣府「令和4年版子供・若者白書」の一覧表の中でも「今の充実感」というものが入っている。子どもたちが一番欲しているのも充実感なのではと推測している。</p> <p>自由に過ごしてやりたいことがやれる場所があると、自己肯定感にもつながるし、その場所を大事にしようという社会貢献への参画という意識も広がってくると思う。</p> <p>しかし、参画の力に無理やり力点を置いてしまうと、そこが子どもにとっての居場所ではなくなってしまうかもしれない。だから、それは結果として生まれればよいし、もっと手前のところで悩んでいる、今を肯定できずに生きづらさを感じている子どもも多くいるかもしれない。そのため、あまり参画したかどうかにかかわらず力点を置かないほうが良いのではと思っている。</p> <p>（事務局）</p> <p>社会参画に向かう力については、少し政策的な書き方になってしまった。あくまで、青少年の視点を大切に、意見を聞きながら進めていきたい。</p> <p>（島田委員）</p> <p>週5日以上、3日から5日に増やすということ、また、常勤のスタッフを複数配置できる人件費等を補助するという事は素晴らしいと思う。</p> <p>13ページの異年齢の子ども同士の交流の部分で、「多世代間の交流が生まれにくいと考えられます」という部分の主語が「拠点や地区センター、コミュニティハウスは」となっている。その次の段落では「中・高生の利用者が大学生となって、支援者側となる好循環も生まれています」ということで、拠点では生まれにくいという趣旨になるのか、この辺りが少し分かりにくいと感じる。この点について、伺いたい。</p>	

(事務局)

おっしゃるとおり、ウのすぐ下の行、「拠点や」は、誤記である。申し訳ない。地区センターやコミュニティハウスは、スタッフの役割として、子ども同士をつなげていくことを期待したいが、通常の運営ですとそこまではできていないということ。スタッフが見つないでいないという趣旨で、主語は地区センターとコミュニティハウスということになる。

(平森委員)

最近の子どもたちは忙しいという話について、確かに忙しい子どもはたくさんいるが、部活動全入という時代から変わっていることもあり、活動場所がない子どももいる。そこで地区センターというのはとても有効だったと思う。地区センターのスタッフがどのように関係していくのか、どのニーズに応えられるようにするのかは重要だと感じる。

子どもの意見を聞くことについては、居場所で活動している子どもたちの意見だけでなく、使わない子どもたちの意見をどのように取り込んでいくのか、地区センターと拠点の認知度の違いなども含めて意見を聞くことが重要だと感じる。

(事務局)

拠点だけで全てを網羅するのは難しいので、地区センターなど所管部署と協力し、できるだけ多くの居場所をつくっていききたい。

子どもの意見については、拠点の利用者からの意見だけでなく、中学校や高校に協力してもらい、調査をするつもりで、認知度などはそれを参考にしたいと思っている。

(辺見委員)

3日から5日になった場合に、スタッフの手薄さが課題と感じる。事業者だけでなく、横浜市が、スタッフの関わり方も含めて考える必要がある。

また、認知度が低いという部分について、広報をすることになると思うが、やり方はよく考えなければいけない。全く知らない人への広報になるために詰める必要がある。

広報については、必要な人に情報が届くように、工夫して取り組んでいく。

(事務局)

スタッフについては、必要経費を計上できるよう努力する。また、金銭面以外で、スタッフの負担を減らせることができないか、連携して取り組んでいきたい。

(梁田委員)

拠点、地区センター、学校などいろいろな形の居場所があることは大切なことだと思う。各法人に任せるだけでなく、居場所のスタッフが何か問題に直面した時に、それを共有できる仕組みがあると良い。

(事務局)

スタッフ間の悩みの共有については、情報交流会をよこはまユースに協力していただき、実施している。研修なども、スタッフの考えを聞いたうえで実施を予定している。その回数を増やすなどは、検討していきたい。

(平森委員)

スタッフについて、どのような人材を募集していくのか。例えば、児童相談所は行政の異動になるため、もともと専門的ではなかった人が配置され、人が変わっていく。連携部門をつくってもすぐ人が変わるようでは難しいので、どのように採用していくつもりなのかは気になっている。

(事務局)

公募要項には、スタッフに求めることを記載していて、採用にあたり確認をしている。そこから、研修や交流会を通じた人材育成ができるように考えている。

(萩原委員)

連携の話では、拠点だけでは全て網羅できないので、既存の社会資源を最大限活用することは重要な方向性だと思う。まずはどのような社会資源があるのか、公共施設にとらわれずに若者が使いそうな場所の洗い出しをすることが大切だと思う。

(事務局)

ご意見について、ぜひ取り入れていきたい。

(津富部会長)

振り返りのミーティングなどに子ども・若者が参加したらよいのではと思う。ドイツなどでそのような事例があったように思う。

スタッフについて、地区センターのスタッフと一緒に勉強、研修をする場が必要だと感じる。区単位で行うなども良いかもしれない。大学生がインターンができる環境などをつくることも、雰囲気が変わるかもしれない。

広報について、地区センターなども含めてSNSの相互フォローをすることで、地区センターを利用している人が地域活動拠点を知っていくという効果があるのではと思った。

また、萩原委員が言ったことにもつながるが、評価されることから離れられる場を子どもたちは求めているように思う。その居場所を利用している人たちの感情をしっかりと聞いてほしい。

調査については、地域活動拠点の認知度が低いように感じるが、施設ごとの名前であれば知っている人もいないのではないかと。また、知名度をあげることも大事だが、知っているが利用していない人に、なぜ利用しないのか、どのような場所なら行きたいのかということワークショップなどで知ることが大事だと感じた。

(事務局)

ご意見について、ぜひ検討していきたい。大学生の参画についても、学生スタッフとやっているNPO法人などもあるので、連携していきたい。

閉 会

資料	資料1	横浜市子ども・子育て会議青少年部会 委員名簿
	資料2	横浜市子ども・子育て会議青少年部会 事務局名簿
	資料3	青少年の地域活動拠点づくり事業の効果的実施に向けた検討について
	資料4	横浜市子ども・子育て会議条例
	資料5	横浜市子ども・子育て会議運営要綱
特記事項	なし	